

『草木発心修行記』の成立と「一心三観血脈」との関連について

堀 端 英 一

〔抄 録〕

草木成仏の代表的文献のひとつ『草木発心修行成仏記』は、平安末期から鎌倉初期にかけて成立の仮託文献とも云われるが、確たる定説がない。本研究においては、書誌的観点から諸本八本を調査し、その中で最も古い秀範書写『草木発心修行記』に着目し、その成立過程について考察した。

まず、秀範の人物像や書写の経緯を知るために、秀範撰の『天台宗所立一心三観師資血脈譜』を中心に関連文献を調査し、併せて当時の思想動向を考察した。注目すべきは、『修行記』の書写時期と一心三観の相承時期が極めて近接しており、しかも両文献の骨子が共通していることである。

考察の結果、(1)秀範は檀那恵光坊流に属する人師であり、(2)秀

範の『修行記』の書写は、その内容の共通性から『血脈譜』の相承が契機となっている、(3)『修行記』は、それを書写した秀範自身が一心三観の相承内容を吟味・推敲する中で、檀那先徳に仮託し作成したものである、との結論に達した。

なお、周知の『草木発心修行成仏記』は、毘沙門堂流の大定坊義憲が、秀範の『修行記』をもとに、その表現を整理・補強し作成したものであることが知れる。

キーワード 草木成仏、秀範、草木発心修行記、一心三観血脈、

毘沙門堂

はじめに

草木成仏の論義においては、非情の草木が衆生と同じように成仏す

るのか、その根拠は何かが問題とされた。それを平易に庶民感覚をもつて表したのが、中世の文芸、能『芭蕉』であり、そこには日本人の持つ古来からの自然観と『法華経』に説かれる色香中道の思想の両者

がよくあらわされている。⁽²⁾

草木成仏思想をあらわす代表的文献の一つとして、檀那疑問・御廟決答『草木発心修行成仏記』⁽³⁾（俊憲書写一三三六年）がよく知られている。ただし、それには諸本八本が存在し、⁽⁴⁾中でも最も古い文献が、檀那記『草木発心修行記』⁽⁵⁾（秀範書写一三〇一年・正教蔵写本）である。

私は、以前より『草木発心修行成仏記』の成立について考察する中で、この『草木発心修行記』に着目し調査を行ってきた。その中で、(1)これを書写した秀範の人物像・思想的背景、(2)書写の経緯・動機、(3)作成者の特定等について、今一つ明確につかめなかった。今般、秀範の著作ならびに関連文献を調査することにより、以上の疑問を明らかにしていきたい。

なお、先行研究としては、草木成仏一般あるいは『草木発心修行成仏記』のみについて論じたものはあるが、⁽⁶⁾本文献について触れた考察は見られない。

本 論

一・檀那記『草木発心修行記』（秀範書写）の内容

その内題には、「無情佛性とは法華之妙旨、草木成佛とは本門之密義なり。」とあり、二つの問答からなる。内容は以下の通りである。なお、ここでは解説は省略し、本文中にその要点をふれるものとする。また、便宜的に、原本にない訓点等を補足し、また引用文については原典により補正している。

〈第一問答〉問。草木既無^ニ慮^ハ知^ハ之心。如何云^ニ發心修行^{シテ}成佛^{スト}哉。

答。草木成佛、本門壽量^{（品）}義也。如來如實知見^{（三界相）}說、^{（是法住法位）}世間相常住^{（ナリ）}文。是草木成佛、誠証^{（ナリ）}。但無^ニ草木發心修行^{シテ}菩提涅槃之義^{（者）}、爾前・迹門說也。本門壽量品、実義アラ^ス。今本門成仏、正意論^{（事）}成道。爾草木無^レ有^{（中道）}理^{（二）}過^{（一）}。依^{（レ）}之金鉾論云。「一草一木一礫、各^{（一）}佛性・各一因果^{（二）}具足緣^{（一）}了^{（二）}」已上。

此文有^{（二）}意^{（一）}。爾前・迹門、故無^{（二）}緣^{（一）}了^{（二）}二因^{（一）}。今本門意故、有^{（二）}緣^{（一）}了^{（二）}二因^{（一）}。他所立爾前說文也。非^{（二）}今意^{（一）}。今本門正意、迷悟^{（情カ）}事悟事合說故、爾前迷悟^{（情カ）}事雖^{（レ）}有^{（二）}發心修行意^{（一）}、不^{（レ）}知^{（二）}本門^{（一）}時迷悟事、發心修行^{（即本門成仏）}也。應知。他人不^{（レ）}知^{（二）}本門說^{（一）}、不^{（レ）}許^{（二）}草木發心修行成佛^{（一）}云事也。

〈第二問答〉又有人問云。有^{（二）}草木發心修行^{（一）}者、何無^{（二）}禮拜等意^{（一）}哉。知、無^{（二）}發心修行之事^{（一）}。答。發心修行之義多意。若故^{（二）}約^{（一）}發心修行者一切無^{（二）}非^{（一）}發心修行事、万法皆無^{（二）}發心修行體^{（一）}也。應^{（レ）}知。汝尚不^{（レ）}知^{（二）}本門意^{（一）}。當位即妙故。情非情、佛界衆生界各別發心修行者、共無^{（二）}當位即妙發心成仏^{（一）}。若汝問意、佛界・衆生界功門可^{（レ）}云也。故汝不^{（レ）}知^{（二）}圓教實義^{（一）}。又非^{（二）}汝^{（一）}。圓宗人不^{（レ）}知^{（二）}此理^{（一）}。止觀中淨名疏、理仏^{（性）}釈云。彼不^{（レ）}知^{（二）}止觀門^{（一）}。釈依^{（二）}本門意^{（一）}故、迷悟事悟事合、非情草木成仏^{（二）}釈也^{（一）}。

加^{（レ）}之金鉾論三重事理不^{（レ）}知、不^{（レ）}知^{（二）}此理^{（一）}。云。雖^{（レ）}有^{（二）}三相即^{（一）}、無^{（二）}事相即^{（一）}云。真言ヨリ劣也ト云。努^{（二）}不^{（レ）}可^{（一）}爾也。彼未悟

ノ故、之背^ニ常同・常別ノ二意^ニ。「天台・真言」ト慈覺大師尺^五ヘリ。是円宗人不可^レ知^レ之耶。依^ニ之金鐔論云^ニ。「應知。衆生得^ハ但カ^リ理、諸佛但^ハ得^カ事。衆生但^ハ事、諸佛證^レ理。是則衆生唯^ハ迷中^ニ之^ニ事理。諸佛具有^ニ悟中^ニ之^ニ事理。迷悟雖^ハ殊、事理體一^ニ。」已上。

我大師最後^ノ時此文云^ニ。前一重^ノ事理爾前^ノ意。次^ノ事理法花迹門。後一重^ノ事理法花本門事理、不二^ノ意也。而本門事理不二者、爾前^ノ迹門迷情事理即悟事也。悟事者証理云也。何況所々文「即事而真」^ト。豈非^ニ真実^ニ言^カ意^ニ耶。爾金鐔論三重事理得意^{セハ}多^ク大事不^レ難。努々不^レ伝^ニ他門^ニ、可^レ秘^レ之。

此草木発心修行記^ハ慈恵大師最後^ノ時他宗破^ニ疑難^ニ、重^テ且^ハ那^ハ此事問給^フ。然大師最後^ノ説、且^ハ那記給^フ故極秘也。之不^レ可^レ伝^ニ他門^ニ。穴賢^ノ賢。

于時正安第三天（一二三〇）五月廿二日書^ニ写^ス之。秀範。嘉□
（欠字、曆カ）三年（三三六カ）五月十四日 自^ニ江師常尊、相^ニ伝^ス之。
△円宗口決。或本云、礼拝等意。已上。

裏書云。

問。一家所立^ノ草木成佛者、有心^ノ故成佛^{スル}耶、爲^ニ當無心^ノ故成佛^{スト}耶。答。有心^ノ故成佛^ス之。

問。若有心^ノ故成佛者、發心修行^{シテ}成佛^ス耶、不^ニ發心修行^セ成佛^{スルヤ}。

答。發心修行成佛也。如^ニ輔行十義云^ニ。已上 且那御問御

廟御答。秘藏之也。

二・その書写、秀範の人物像

秀範撰述の文献には、『天台宗所立一心三觀師資血脈譜』（正教藏写本、以下『血脈譜』と略称する。）があり、これを中心に、從來あまり知られていない秀範の人物像を探つてみた。なお、近年、成田教道氏が『血脈譜』の諸本四本を校合し、身延山文庫藏日誉本を底本とし、『惠檀兩流秘決上下』（『興風叢書』十七）⁽⁸⁾として翻刻されている。内容は、正教藏や日光天海藏写本とほぼ同文であることが確認され、本論文中の参照文献の頁数の表記も、同叢書を採用させて頂いた。

(1) 秀範撰『血脈譜』（『惠檀兩流秘決上下』）の概要

① 本文献の構成（三部）

第一部 「天台宗所立一心三觀師資血脈譜」

- a. 血脈譜相承次第、b. 一心三觀血脈（慈覺大師私記）、c. 一心三觀血脈、亦名事々不相即義、血脈次第（一流・恵心流・檀那流）・世流布因縁（舜海血脈）・心觀夢想伝、d. 天台四重妙解相伝、e. 大通仏云事、f. 一心三觀口決（四明流三重觀法決）、g. 鏡像円融口決事。

第二部 「恵心流諸箇大事」

- 「七箇大事」 a. 一心三觀、b. 無作三身、c. 常寂光土義、鏡像円融譬、e. 蓮華因果者、f. 四句成道者、g. 証道八相、「五箇大事」七箇中 a. e. 「四箇大事」 a. 道邃相伝四箇、b. 恵心所定四箇。「三箇大事」寂光大師相伝。

第三部 「惠壇両流諸箇秘訣下」

a. 二ヶ大事（一心三観・無作三身）、b. 宝塔口決、c. 法華分身口決、d. 三種隨緣不變、e. 十界互具人証、f. 菩提樹金剛座口決、g. 草木成仏人証、h. 一念三千并依正不二口決。

② 一心三観血脈の相承次第

天台三観の心要は、円融相即・互具の頓旨である。北齊の惠文禪師は竜樹の中観論を得て、因縁所成法が、即空即仮即中の不二の法門であることを悟り、陳朝南岳恵思を経て隋朝の天台智者大師（五三八―五九七）に伝える。これを受けて智者は「止と観との法門」を開き、それを章安が記録。以下湛然（七一―七八二）等を経て、道邃和上より本朝の伝教大師（七六七―八二三）に伝授される（「根本相承」と称す）。以下、慈覚大師・相応和尚・遍豪僧都・慶命座主・慶増大僧都・舜海僧都・寛誓律師・長豪院主・忠尋座主・皇覚法橋・範源法印・俊範法印・心観僧都・澄禅阿闍梨・祐円大徳・定祐・長命大徳を経て、本書の撰者である秀範大法師が相承したものである。

③ 一心三観相承の要旨

秀範が、正安三年（一一三〇―一一）四月十二日に相承した一心三観の要旨は以下の通りである。

ア・空は即ち畢竟不生。有は即ちその性相を尽す。中は即ち体を挙て皆な常である。「その性相を尽す」とは、十界十如の

依正は宛然として、一心に在りと雖も、その事は猶別である。事と理は即し和融するが、極位の普現の色身の事は格別で皆な相即せずとし、これを「氷水の喩」を引いて説明している（『血脈譜』中「血脈譜相承次第」・「一心三観血脈慈覚大師私記」。『興風叢書十七』三二頁・三四頁。）

イ・事々不相即の義である事性の差別を以て、本門の本意となす。人は人・畜は畜、一分不動にして而二の時は、千差万別。皆な果中の勝用と云える。此を事法の性・相は常住等と云う。又、迹門は不二、本門は而二にして、迷悟・因果はそれぞれ不二而二の關係である。

ウ・「一心三観血脈、亦名事々不相即義」。『同』三五頁中。）山家『顕戒論』に云う「一心三観伝於一言」の一言については、恵心流に種々の相伝がある。

ア・「無我一言」…「思義によつて不思議を顕す」（止観五）より、本理の一念三千を立てる。法々は本より天然である。不思議の無我に依つて、凡夫・外道・権教の我執を離れ、法性の大我を顕す。

b. 「生死一言」…一心三観とは、生死の二字に落付く。「これ（蔽・塵）起れば法性起る。これ滅せば法性も滅す」（止観三）。生滅は是本来の生滅であり、中道の一理より、自然に死に天然に生ず。ただ生死を動ぜずして空仮を照らす。生死を改めずして、止観の行を修する、これが事々不相即の義である。諸法の念々の生滅は、是れ常在・現前の法である。

「前念を境と為し、後念を智と為す」とは、境智の二法を以て、生死の二法を問とざすことである。「生死の法は、本よりこれ涅槃。今生死を成ずとは、著を生ずるに由るなり」（弘決十）と云える。

c. 「顕密の不同なし」…密の心は唵うんの一字。釈迦如来は後夜成道の時、不動尊にこれを授すという。唵字とは三身即一の義、本門無作の三身三觀の意である。顕教の意は「境智の一心」の一言である。根本大師は道邃和上に値い、「境・智相應の一言」に一心三觀を口決され入眼された。

d. 「境智相應の一眼」（五眼中の仏眼）…凡そ森羅の万象は六塵の当体にして格別の形色、即ち是れ中道である。心性不動の眼の時、一々の自体は皆これ有の法なれば仮諦である。

根（心）と境とは障碍無くして、一々に見聞・覺智される分は空諦である。本有常住の三諦は世間・出世間を簡ばず。無作三身とはこの意である。諸法は皆常住にして、五百塵点成道の本仏の寿命である。三千の諸法は皆無作の三身の寿命、即ち三諦・三觀の境智也。境智冥合は本より自受用の重の法門である。所詮、森羅の諸法は尽きることはなく、本仏の寿命海であり、これを「是法は法位（一如）に住し、世間相は常住」と云う。根本大師は此の文を寿量品の文と引き給う。

（以上、「恵檀両流諸箇秘訣下」二ヶ大事。『同』七八〜八一頁。）

エ・毘沙門堂経海法印は、無動寺助法印（俊範）より一心三觀を習うとき、始めて境智相應の一言を伝えられた。料簡のとき落涙甚しくして、血脈を取り給けりと云う。彼の法印は檀那流の人で、始めて恵心流に入りこれを習う。これより知れることは、この法門は檀那流には分絶して、恵心流のみの独歩の秀句である。

「肝心秘訣」（欠本？）が云うには、迹門の意は始覺転迷の修行の故に、一心の寂照に約して、本分の境智を判じ、九界の妄法より仏界の真法に入る。たとえば、雲下に立ちて雲上の月を見るが如し。本門は本覺久成の妙談の故に、直に生得の色心に約して寂照を示す。よって聞より外に修行は無く、聞いて任運に照す。即ちこれ妙証也。雲上の月宮に立ちて、月下の雲を見るが如し。雲とは見えず、全体光明也。故に本地の月宮に居すとは、三千の雲霞、皆悉く本仏の全体にして果海の本尊也。草木の去来も有情の四威儀も、佛果性海の振舞いである。

（「恵檀両流諸箇秘訣下」二ヶ大事。『同』八〇〜八一頁。）

(2) 本文献より知れる秀範の事跡

① 相伝の経緯

本書中に記された年代の知れる相伝等の経緯は、次の通りである。
・正安第二曆（一三〇〇）十二月晦日

秀範が、相承前の不思議な体験を記す。

・正安三年(一三〇一) 四月十二日

「血脉譜相承次第」を相伝。(なお、「一心三観血脉(慈覚大師私記)」・「一心三観血脉亦名事々不相即義」血脉次第(一流・恵心流・檀那流)・世流布因縁等には、相伝時期の記載はないが、一連の相承内容である。)

・正安三年(一三〇一) 四月十二日

「二ヶ大事」(一心三観・無作三身)・「蓮華因果」相伝。(なお、秀範は、その一月後の正安第三天(一三〇一)五月廿二日に『草木発心修行記』を書写している。)

・乾元二年(一三〇三) 六月十八日

「二ヶ大事」相伝。(二度にわたり相伝)

・嘉元二年(一三〇四) 五月二十二日 「天台四重妙解」相伝。

・嘉元三年(一三〇五) 三月十一日

「一心三観口決(四明流三重観法決)」書写。

・嘉元三年(一三〇五) 五月十九日 「大通佛云事」書写。

・徳治第三天(一三〇八) 閏八月二十五日

「恵檀両流諸箇秘決下」相伝。(ここで、秀範はすべての伝受・記述を完了。)

・嘉暦二年(一三二七) 六月十日 秀範より相伝した連心は、常尊卿阿闍梨御房にこれを附す。

② 秀範の所属流派を伺い知る『血脉譜』中の表現としては、「恵心流諸箇大事」には「恵心所定四箇」等が説示されているもの、

「常寂光土義」の前文の秀範の注記には、「已下至此者、北谷門跡口決也。於今者雖有憚、聊有次故、示依文許。於義者在心符。尋之可習也。」とある。つづく「常寂光土義」の末文には「私云、殊約方寸肉団、示寂光。円宗、玄旨元意也。尤有秘伝、可尋之。已上附恵心流、密示門徒義。偏為愚案也。全非他要矣。」等とある。これらは恵心流の常寂光土義や鏡像円融義に対し、秀範が「秘門徒義」を示しており、そこにはしばしば北谷・恵光坊流の法門が展開されている。書中には「已下北谷」「北谷口決」「北谷秘之」等の表現も散見する。

(『同』五頁参照)

③ 「恵檀両流諸箇秘決」の「二ヶ大事」には、「于時嘉元二年(一三〇四)六月初日。於武州敢伝之。」との標記もあり、

秀範は、「血脉譜相承次第」や「一心三観血脉、慈覚大師私記」等を、関東における恵心流の拠点である武州仙波に於いてこれを伝授したことが知れる。

(3) 秀範の人物像

以上により、秀範(一三〇〇―一三二七?)は、檀那流の中でも恵光坊流に属する者として、その立場から恵心流の諸義を相伝し、種々に論評を加えている。内容的には秀範の属した恵光坊流の法門

が中心となっており、秀範は本書を弟子連心に相伝する際に、「此重書者惠光院大事中大事也。」と記している。

さらに秀範撰『天台灌頂玄旨』¹⁰⁾「三句血脈」(惠光坊流五箇血脈の一)には、「定仙↓経祐↓定敵↓秀範↓惠海」の相承譜を載せる。秀範は定敵より相伝した『天台灌頂玄旨』を仙波の惠海に授与しており、ここでも惠光坊流の血脈を継いでいることが知れる。なお、惠海は明全の弟子で、秀範之『名別義通義引難』(日光天海蔵)を書写している。

また、伝頼真撰『山家要略記』¹¹⁾「秘口決要文抄」正和四年(一二八五)の奥書からは、檀那流記家の棟梁義源阿闍梨(一二八九—一三四三)との交流が知られ、義源は凡僧の秀範大法師に対し、「依奉感求法篤志。以斯初卷奉授秀公大法師訖。」と、最大限の敬意を払っている。

三・『草木発心修行記』書写の経緯(作成の動機)

(1) 『血脈譜』の相伝と『草木発心修行記』書写との関係

『血脈譜』の主要部分は、正安三年(一一三〇—一)四月十二日に、秀範が長命大徳より相伝している。一方、檀那記とする『草木発心修行記』は、それより一月後の正安第三天(一一三〇—一)五月廿二日に秀範によって書写されている。なお、その『修行記』書写の原本の所在、あるいは誰からその口伝を受けたかの記載はない。

その「一月後の時期」とは、秀範が天台所立一心三觀等の相承を成し遂げた感慨のなかに、その内容を様々な観点から推敲・吟味し

ている時期でもあろう。以下、『血脈譜』の相承内容が、『草木発心修行記』にどのように反映されているかを検証してみたい。

(2) 両文献の共通性

両文献の共通性については、次頁の表1・記載の通りである。これにより、『草木発心修行記』の骨子は、秀範が長命より相伝した『血脈譜』の事事格別の義である一心三觀の法門に依拠していることが知れる。

(3) 『草木発心修行記』書写の動機

『血脈譜』「一心三觀、慈覚大師私記」には、一心三觀の要旨が「事事格別」にあることを明すべき理由を、つぎのように述べている。

「後学の徒は此の一言を失して、堅く「事理不二」の文を執せは、全く事理相即の義に迷へり。故に事の不即を以て、皆な差別門に属すとなす。これに依つて千論横さまに起り、万難通じ^{カタ}。ただ相即と云つて、以つて難を遮せんとす。全く相即・融通之意無く、邪を以て正を顯せんと為す。何を以てか階^カう可けんや。甚た傷しきかな。」

慈覚大師(七九四—八六四)の時代には、「草木自作仏」を認めない一類がおり、安然『即身成仏義私記』¹²⁾には、それを慈覚が「宗旨にもとる」と嘆いた旨が記されている。秀範の時代の諸文献からも、草木

表 1 両文献の共通性

『草木発心修行記』	『一心三観血脉譜』
草木成佛は本門壽量(品) ⁽¹²⁾ の義也。「如来は如實に知見す」の説、「世間相は常住なり」の文は、草木成佛の誠証である。	森羅の万象は六塵の当体、格別の形色、即ち是れ中道也。「是法は法位に住し、世間相は常住」 ⁽¹³⁾ 是也。根本大師は、此文を壽量品の文と引き給う也。 (「二ヶ大事」、『興風叢書十七』80頁中)
草木に、發心修行菩提涅槃の義無しと云うは、爾前迹門の説である。本門壽量の実義に非ず。今本門成仏の正意とは、「事の成道」を論ず。	事々不相即の義である「事性の差別」を以て、本門の本意と為す。人は人・畜は畜、一分不動にして而二の時は千差万別、皆な「果中の勝用」と云へる。此を事法の性・相は常住等と云う。又、迹門は不二・本門は而二にして、迷悟は不二而二、因果は不二而二である。 (「一心三観血脉」、『同』35頁中)
爾前・迹門の故には縁了の二因なし。今本門の意の故に「縁了二因有り」。他の所立は、爾前の説文也。今本門の正意は、「迷情事・悟事合の説」なるが故に、爾前迷情の事に、發心修行の意ありと雖も、本門を知らざる時は迷情の事なり。發心修行するは即本門成仏の体(「隨縁真如」)也。	法爾として一心に持つ所の十界は、「隨縁顕現して、修具の十界」を浮かべる。本有の一理(不變真如)は明鏡、縁起する所の十界は影像(隨縁真如)也。 (「四、鏡像円融譬者」大和庄流口決「自影自浮」、『同』50頁下～51頁上)
	華とは、九界の迷法無明。蓮は、仏界悟の法々の性である。もし「蓮・華一体」の旨を得れば、「權実不二・迷悟不二・因果不二」に於いて自在を得る。故に生仏も不二にして、一念に三千を攝すること必定にして宛然也。 (「五、蓮華因果者」『同』53頁中)
發心修行の義に多意あり。若し發心修行は、すべて發心修行の事に約す(現量)と云うならば、万法は皆發心修行の体(真如)は無き也。知ぬ。汝はなお本門の意を知らず。「當位即妙」の故なり。情と非情・佛界と衆生界と各々別して發心修行せば、共に當位即妙の發心成仏は無き也。 ⁽¹⁴⁾	常寂光土義とは、浄土は浄土ながら、穢土は穢土ながら其の体を動ぜず、当体は即ち寂光也。「當位即妙」は本位を改めず。天台は「一切国土の依正は即ちこれ常寂光也」と云う。一切の言は浄・穢に亘る。浄穢の依正は共に「当体を動ぜず」。即ち諸仏の内証の寂光である。 (「三、常寂光土義」、『同』48頁中)
「天台・真言は一」なり。所々の文に「即事而真」と釈す。	「顯・密の不同無し」。密の心は ^{オン} 庵の一字也。釈迦如来の後夜成道の時、不動尊にこれを授すと見たり。後夜成道の一心三観とは、庵字の三身即一の義、本門無作の三身三観の意である。顯教の意は境智一心の一言也。根本大師は道邃和尚より、「境智相応」の一言に一心三観を入眼し給う也。 (「二ヶ大事」、『同』79頁上)

成仏には各流派で様々な論義がなされていた。¹⁶⁾

殊に、秀範「恵檀両流諸箇秘訣」（草木成仏人証）には、恵光坊門跡の義として、『法華経』提婆品の「三千世間に芥子ばかりも身命を捨てざる処なし」に基づき、「此の一大三千世界は釈尊先生（世カ）の身骨なり」とし、草木を釈尊の眷属と見る。また涌出品の大地より現れ出でた四行菩薩を四大に置き換え、釈尊の地大と合わせ五大成仏による顕相とし、「諸法は本来無作覚悟の佛体也。仍って草木成仏も亦爾也。今始て成仏するに非ず。本来の佛体也。諸法は皆三身の振舞なる条、眼前のこと也。」としている。これによれば、草木はもとより衆生においても発心修行の義は出てこない。

四・経海『一心三観血脈』による検証

秀範の『血脈譜』（二ヶ、大事）のなかには、俊範の直弟子である心観僧都（月性房薩摩法印）が見聞した毘沙門堂経海の相承の様子が間接的に述べられている。一方、経海撰の『一心三観血脈』¹⁸⁾には、本人自身の言として、相承の内容を語るものである。今般、その内容も参考に『草木発心修行記』との関連を検証してみたい。

(1) 経海『一心三観血脈』の概要

経海法印（一二〇七―一二七六？）は、勅命によつて恵心流の無動寺俊範法印（一一八七―一二五九）を師として恵心流の教義を相伝したとされる。経海はその内容を『一心三観血脈』にまとめている。その概要は、一心三観の法門をもつて「真言教の至極の法門」であ

るとして、先ず無動寺慶命座主（一〇四八―一一三三）の口伝を述べ、「山王と云う名は一心三観の法門を表す。山の字は、豎の三点に横の一点を加う。是則ち三諦一諦の心也。王の字は、横の三点に豎の一点を加う。又三諦一諦の心也。横の三点・豎の一点、横の一点・豎の三点、三諦一諦は一に非ず、不縦・不横の意である。」という。また、「事理和融の知見の時は、一心の中に三観歴々として並びて俱に起ると覺る也。」として、伊字の三点に喩を借て、例を自在天の面上三目に引くとし、「此の一心に俱に起るところの三観は、仏果菩提の時は、果地の三身と顯る也。」とし、三点・三目が、非並・非別、不縦・不横の関係であることを説明する。

（『興風叢書十七』一六六上―一六七頁下、一六八下―一七一頁中。）
慶命はこれを遍豪に伝え、さらに慶増と長宴の二人に相伝している。慶増の系統では、いわゆる「舜海血脈」の相伝の様子が簡単に記されている。一方、長宴の系統は、仁慶↓良祐↓寛勝↓範源↓俊範を経て、静明と経海の二人に相伝されている。

次に、迹門と本門の違いを述べ、迹門の意は、「万法はこれ真如、不変に由るが故に」万法は悉く真如の一理に帰るとし、本門の意は、「真如はこれ万法、隨縁に由るが故に」と云つて、本門寿量品の前には「万法は悉く真如の全体にして、諸法は悉く本有常住也。」とし、「則ち俗諦常住の旨を談ずるが故に、三諦の境・三観の智は、皆な俱に本有常住にして、而も一心に此を備たるを一心三観と称す。」としている。（『同』一六九頁中。）

特に、秀範の『草木発心修行記』との関連で注目されるのは、次の二つの問答があげられる。

①「尋。金鉉論に「一念に三千を具すとは、二經一論に依る。」（取意と云ふが、何を指すのか。答。法華方便品の十如是、大經・大論の三種世間、起信論の一文を指す也。¹⁹金鉉論には「万法は是真如、不変に由るが故に。真如は是万法、隨縁に由るが故に」と云う。三種の一念（具）三千のことは、事造の一念三千・理造の一念三千・迷妄の一念三千と也。

尋。証拠有り耶。答。金鉉論に「衆生は但だ事、諸仏は事理有り」

（取意）の文あり。事は即ち三千世間の法門、理は一如平等の理也。衆生の事有りとは即ち三千の法門也。仏の事またこれに同じ。然に凡夫の感見する所の事は、同じく一念三千なれども、行ぜられる己心中の一念三千には非ず。己心中の一念三千とは、仏果所具の事相の法門也。「正觀章」の一念三千是也。先徳は此の事を釈述し給うに、迷妄の一念三千の事理は、即ち衆生所具の法也。事造・理造の一念三千は、仏果所具の功德也。」としている。（『同』一七四頁中～一七五頁上）

この三重の事理の解釈については、『義科盧談、法華玄義』²⁰には、第一重の「衆生は但理・諸佛は事を得る」とは、衆生は但た理性なるが故に衆生を但理と云う。三千は理に在って同く無明と名づくというが如し。諸佛は此の理を修得するが故に、諸佛は事を得ると云う。三千は果成にしてみな常樂と稱すが如し。第二重の「衆生は但事・諸佛は理を證す」とは、迷の有を以って凡夫に屬すが故に衆生を但事と云

い、理に背すは即ち迷の事也。理を悟るを以て諸佛と名づく。故に諸佛は理を證すと云い、理に叶うを以て證理と云う。第三重の「これ即ち衆生は唯た迷中之事理有って、諸佛は具に悟中之事理あり」の意は、上の兩重の事理を束て、一箇の事理を成す。所以に上の文は、衆生を以って或は事に或は理に屬せしむ。此事理は惣て而に「迷中之事理」と名づく。又、諸佛を以って或は事に或は理に屬せしめる故に、これを束て「悟中之事理」と名づけるものである。今の所立の事相の互具とは、佛知・佛見上の所論であり、悟中の事理とは是也、としている。

但し、ここでは秀範の『草木発心修行記』に見られるような、金鉉論の三重の事理を爾前・迹門・本門に配し、爾前・迹門をまとめて迷妄の事理と位置づけるものではない。秀範は、事事格別・本門而二・真如隨縁の義を勝とする立場である。

恵心流の『摩訶止觀伊賀抄』²¹（十一 理造・事造事）には、「仰（心賀）曰く。理造とは法體也。この法體はやがて「事事格別」となる。これを事造という。惣じて止觀は境智不二の上にそのままなる法爾の法體也。その上に境を理造と云い、智を事造と云也。」とし、また「師（良意）の曰く。理造とは理具也。理具によつて事用有り。理具は不變真如、事具は隨縁真如也。」としている。これによつて秀範の『草木発心修行記』では、第一重を爾前、第二重を迹門、第三重を本門に配したものである。

② さらに、經海は、事事不相即の「一心三觀事」を含む十の法門を

挙げる中で、その第一に「草木成仏事」をあげ、「此の如き法門を能々習えば、皆一事に成ずる也。」として、同様に理解すべき旨を明示している。
（『同』一七三頁下―一七四頁中。）

(2) 経海『一心三観血脈』と秀範書写『草木発心修行記』との関連

俊範の直弟子である心観を経て長命より『血脈譜』の相承を受けた秀範も、おそらくは、折に触れて経海の『一心三観血脈』相承の内容にも話が及んだものとも思われる。

秀範書写の『草木発心修行記』と経海『一心三観血脈』とは類似点が認められ、特に注目すべきは、両文献が『金錚論』の三重の事理に触れていることである。また、経海は、一心三観と軌を一にする法門の第一に「草木成仏事」を挙げている。秀範が、一心三観の相承内容を推敲する中で、「草木成仏の在り方」について思いを馳せたのも、当然の成り行きとも思われる。

経海『一心三観血脈』は、経海・観隆・義憲を輩出した毘沙門堂流系統の文献である。なお、小稿において詳しく言及する余地はないが、調査の結果では、毘沙門堂経海の跡を継いだ大定坊義憲僧都（一三〇四―一三三七）は、秀範の『草木発心修行記』をもとにその内容を整理し、新たに草木の生住異滅の「四相」を以て発心修行菩提涅槃の姿であるとする見解を盛り込み、檀那疑問・御廟決答『草木発心修行成仏記』として作り直したものであることが知れる。²³ その教義の内容は、八年間にわたる義憲の講義録『毘沙門堂（雑々口決集）²⁴』に反映

されている。

まとめ（『草木発心修行記』の作者）

『草木発心修行記』には、天曆・応和の宗論等を踏まえ、檀那疑問・御廟決答と記されている。御廟大師（良源九二―九八五）は一代の論師といわれるが、惜しむらくは真撰とされる文献が少ない。或は、宗門の発展のため論義を重視した良源は、多義が成立する場合にその一方に立つ見解を示すことが、弟子の自由な意見を阻害することを戒めたためであろうか。なお、慈覚大師（七九四―八六四）を師と仰ぐ良源は、『唐決』（天台宗未決²⁵）に見る円澄・徳円等の古徳や、台密を確立した五大院先徳（安然八四一―八九五？）と同様に、草木自作仏の思想を持っていたであろうことは想像に難くない。²⁷ 但し、実際の論義の場においては『宗円集』²⁸等に見る如く、「成・不成無相違」の立場を採ったものと考えられる。檀那先徳（覚運九五三―一〇〇七）も列祖の章疏を重んじ、観心的本覚法門を尊崇する傾向を有していたとされるが、具体的に本書の成立を裏付けるような草木成仏を伺わせるものは見られない。

文献的な見地からすると、秀範の『草木発心修行記』と同じように寿量品を根拠として草木発心修行を説くものは、心賀『日記』²⁹（一三〇〇年頃成立）の頃に至って見られるものである。また同じく猪熊良聖の『例講問答書合』³⁰（一三五〇年頃成立）や無動寺延海（一四二六―）の『手中抄』³¹がある。なお、頼増の『宗要宝樹坊』³²（成立一二三四

年頃）には他流の義として引用されているが、そこでは批判的に扱われている。

既に述べたように、秀範が書写した『草木発心修行記』は、『血脈譜』の相承のなかで、長命より秀範に伝えられた一心三観の内容がその骨子となっている。さらに、同類の口伝である経海撰『一心三観血脈』の中には、『草木発心修行記』と同じく『金錫論』の三重の事理がふれられ、さらに草木成仏の法門と一心三観の法門が軌を一にすることを挙げている。

以上述べた事実等から判断すると、秀範が長命から相承した事各別の義とする一心三観の内容を吟味・推敲する中で、それと軌を一にする法門である「草木成仏の在り方」に思いを巡らした結果、併せて湛然・安然等の周知の文献⁽³³⁾あるいは政海『類聚鈔』⁽³⁴⁾（成立一二九八年頃）の法華円教の主張等をも踏まえ、本門寿量品を根拠とする『草木発心修行記』として整理したことが伺われる。以上を勘案し、『草木発心修行記』の作者は秀範自身であるという結論に達したものである。

なお、中古天台の文献において散見されることではあるが、それを「檀那記」としたことについては、『血脈譜』『二ヶ大事』中に見る如く、「境智不二」の伝承譚として相応・檀那の思想的なつながりを示す記載もあり、また秀範自身の属する恵光坊流の祖である檀那先徳に仮託し、檀那記『草木発心修行記』と名付けたものと思われる。

以上

〔注〕

(1) 能『芭蕉』…日本古典文学大系四一『謡曲集』下、三八頁（岩波書店）。室町時代の能楽師金春禪竹作か。『芭蕉』の組立て論拠の「菓草喻品」は、政海『類聚鈔』（真如蔵）に沿うものである。

(2) 日本人の自然観と『法華経』については、

末木文美士『日本仏教史（思想史としてのアプローチ）』一六四～一七二頁（新潮文庫）。日本と中国との自然観の違い…家永三郎『日本思想史における』宗教的自然観の展開』五〇二六頁（創元社）。白川静『詩経』一四〇二〇頁（中公新書、『万葉集』との比較）。

『法華経』の「ものの見方」については、

「方便品」には諸法実相をうたう。智顗『摩訶止観』巻頭には「諸法の実相を直観すれば、一色一香も中道に非ざることなし」（取意）とし、我々の眼前に展開される六塵（色声香味触法）を、

単なる客観的事象と見ないで、その中に真理の活現の姿を見るならば、一色一香も中道実相であり、常寂光の浄土・覺りの姿に外ならないとする。また、日本中古天台の『等海口伝鈔』第九卷三七九頁）には、「天台宗の宗旨とは、十界三千の万法が本有常住であって、自受用本覺の仏である。これが常に靈鷲山におられる教主であり、天台宗の本尊である」とし、我らは森羅の万象の本尊より直受あるべしとしている。

(3) 檀那疑問御廟決答『草木発心修行成仏記』（後憲書写一三三六年）…『日仏全』二四卷天台小部集釈三四五頁上（仏書刊行協会）。本書は、安永七年（一七七八）、三井敬光が顕密・和漢に亘る指南書の一つとして整理校訂収録したもの。

(4) 諸本には、次の四種八本がある。

- ① 真如蔵、写本『草木発心修行成仏記』（書写相伝の奥書なし。）
- ② 無動寺蔵、写本『草木成仏記』（観音寺舜興が一六五八年に宝園院本を書写したもの。さらに一八一一年に法曼院真超が書写。
- ③ 長谷川市郎兵衛、刊本『草木発心修行成仏記』…a. 叡山文庫

池田史宗蔵書『学天台宗法門大意』（一六六〇年開版）。b. 叡山文庫雙巖院蔵書（一六六二年開版）。c. 高野山金剛三昧院蔵『教觀日記』のうち（一六六六年開版）。d. 大正大学蔵本「縁山南溪蔡華樓書籍」十二小部集釈（一六六九年開版）。

④『大日本史料』第二編五冊九七一頁。寛弘四年（一〇〇七）十月三十日（覺運贈僧正時）の条「草木発心修行成仏記」（訓点ナシ）（東京大学史料編纂所）。

⑤檀那記『草木発心修行記』…正教蔵写本。秀範書写一三〇一年。さらに江師・常尊と相伝した。『草木発心修行記』については、直海（一三六七―九六）の『雑雑私用抄』（『天全』卷三）に引用あり。なお、本文献は、覚林坊主（禅英カ）の『草木成仏相伝』と合本となっている。

⑥先行研究の主なもの（但し『草木発心修行成仏記』についてのみ）

①末本文美士説…爾前・迹門・本門が見えて、いまだ観心に収める四重興廃がない。院政期から鎌倉初期辺りの成立。（『平安初期仏教思想の研究』「草木発心修行成仏記」四一六―四二一頁（春秋社）。

②田島德音説…止観為本、観心為先の教義。院政時代頃であろうか。（『仏書解説大辞典』小野玄妙編、大東出版社）『草木発心修行成仏記』解題二九頁）。

③三崎義泉説…鎌倉時代の秘伝書を書写（『止観的美意識の展開』五〇七―五〇八頁（ベリカン社）。

④大久保良峻説…本文献の内容は突飛なものでなく、良源に帰することは十分可能である。とはいえ、こういった思想を良源以後の中古天台の中に位置づけようとする試みもなしうであろう。しかし、日本天台ではすでに安然が相当に進展した教義を提出しているのだから、後のものが必ずしも作者を明確にしえない場合、教義内容によって成立の時期を判定することにはつねに困難がともなう。ともかく、今は良源が草木成仏を主張した可能性だけを記するに止めておく。（『天台教学と本覚思想』六五―六七

頁（法蔵館）。

⑦秀範『天台宗所立一心三観師資血脈譜』…正教蔵写本。なお、常尊は秀範の『血脈譜』を連心より相伝し、ほゞ同文の『両流兼含集』（日光天海蔵写本）を撰している。秀範は一つ一つの相伝を積み上げてまとめ上げたのに対し、常尊はまとまったものを書写・推敲したに過ぎず、両者には意識のずれが感じられる。

⑧成田教道編『興風叢書』十七…興風談所発行（平成二五年十二月十三日）。『惠檀両流秘決上下』（二九―一二〇頁）。

⑨最澄『顯戒論』「伝於一言」…『大正』七四卷五九〇頁下。

⑩秀範『天台准頂玄旨』…中山法華経寺蔵写本。「三句血脈」（常寂光土第一義諦・靈山浄土久遠実成・多宝塔中大牟尼尊）。

⑪大原座主顕真撰述『山家要略記』上巻「秘口決要文抄」の奥書、『続天台宗全書』神道一六四頁、春秋社。（『山家最要略記』奥書、秀範記載）

⑫『法華経』本門寿量品…『大正』九卷四二頁下。「如來如實知見三界之相。無有生死若退・若出。…不如三界見於三界。」

⑬根本大師の口伝…出典不明。「是法住・法位・世間相常住」の文は、字句的には、『法華経』方便品（『大正』九卷九頁中）にあり、法位とは「如」であり、如相は常住であるという（『法華文句』第四下『大正』三四、五八頁上）。寿量品では「如來如實知見三界相」として、果上（事）に諸法実相の常住義を具して、非情の草木ながら遮那の覚体とする意（参考『法華二十八品肝要』）。

⑭當位即妙…入妙のあり方に、安位・昇進の二義がある。（『法華玄義釈籤』巻第一（『大正』三三卷、八四三頁中）。「昇進は段階的に上位に昇ってゆくことであり、安位とは現在ある状態でそのまま絶対と考えられる。昇進は始覚的であり、安位は本覚的ということもできる。それ故、昇進の立場では発心・修行が考えられるが、安位の立場では発心・修行が必要ないことになる。（末本文美士『平安初期仏教思想の研究』四一七頁）。『大和庄手裏鈔』では、俊範は、案位・昇進を同等に評価している（『続天台宗全書』口決1、恵心流1七

四頁。一二八九年頃成立)。

- (15) 安然『即身成仏義私記』…『日仏全』二四小部集釋二一六頁上。「貞觀五年六月法華會、即身成佛之證起矣。山家有一類執者、横計即身成佛者、只是即身之中心作佛、非身作佛。而以二妨。雖再三難問之。」「又此法華會彼執者只計草木作佛、依報隨作、不許草木自作佛。大師深噴失宗旨。」

(16) 當時の草木成仏論には、次のような文献がある。

- ① 不許草木発心修行…四明『教行録』。播磨道遂『摩訶止観論弘決纂義』。証真『止観私記』(草木自心・自力無し。一仏成道時のみ)。阿弥陀房(厳俊)『阿抄』。安居院聖寛『了因抄』(木石は無心鉢相、無始横計翻無し)。伝源信『六即義私記』(理即)。
- ② 草木発心修行…東陽七百箇条抄(天然の発修、相は四季の転変)。心賀『日記』(法體法爾)。政海『政海類聚鈔』(諸法実相・色香中道理・円教色心不二)。直兼『口伝明灯抄』(相貌四季転変。四相批判)。尊海『円頓章見聞』。静範『宗要集聞書』(四相・四季)。なお、恵心流の論義文献はほぼこれ等に準ずる。檀那流竹林坊『堅林抄』も同じ。猪熊『例講問答』(草木慮知心あり・如来如実に見し一色一香皆遮那の実体・色心は皆真如の变作)。「光聚坊」(草木六識ナシ。九識カリタ心アリ。事発心修行成仏。安然、円意具理仏性、必可具行仏性也)。恵尋『一心妙戒抄』。
- ③ 密教、草木発修…俊範『一心三観等口傳』(阿字第一命、六大無礙、體の即身成仏)。秀範『血脈譜』。大和庄口伝(不動尊授記)。智証『理知一門集』(証観、不空智古藏經。草木成仏は金剛界五字の成佛、即ち法華世間相常住の意)。
- ④ 草木不成仏…伝皇寛『三十四箇事書』(草木衆生は常住・體不捨。成立一二五〇以降。西塔恵心流雲承相伝)。公海『宗要如影随形抄』(無作実佛、不成)。尊舜『六即義草木成仏』(草木不発心修行。転迷開悟義無之。法界無分別心住。当体不改。処本有無作覚体也。無作三身覚前実仏)。
- ⑤ 不許非情成佛…恵心仮託『三身義私記』(因果理甚不可也)。
- ⑥ 恵光坊四義(恵鎮『宗要白光』)…a. 旧三重抄義。草木成仏・発心修行共に不許。b. 恵光房根本相承。理性の成仏を許し、事相の発心修行並びに成仏は無し。c. 永弁已来相承。成仏は事・理共に許し、発心修行は無し。d. 竹林房相承実義・恵光の一義。事相に発心修行成仏す。
- (17) 『法華經』提婆達多品第十二…『大正』九卷三五頁中。
- (18) 經海撰『一心三観血脈』…身延山文庫写本…成田教道編『興風叢書』十七。一六五—一七七頁。
- (19) 一念(具)三千(性相)…これに付いて『金鉤論』には「若不立唯心一切大教全爲無用。若不許心具圓頓之理乃成徒施。信唯心具。復疑有無。一塵一心即一切生佛之心性。何獨自心之有無耶。…則隨縁・不變之說出自大教」と云う。『大正』三二卷七八二頁中。
- 二經一論…『法華經』方便品十如是(『大正』九卷五頁下)。三種世間、『智度論』(『大正』二五卷四〇二頁上)。「涅槃經」(『大正』十二卷六三〇頁中、七一頁下、七九〇頁中)。「起信論」真如不變・隨縁(『大正』三二卷五七六頁中、五七八頁上下)。
- なお、『六十華嚴經』中には、明法品「所有諸法皆由心造」、夜摩天宮菩薩説偈品「心如工畫師造種種五陰。一切世間中莫不從心造」、十地品「三界虛妄、但是心作」(『大正』九卷、四六〇上・四六五下、五五八下)と、心と一切法の關係を明示。
- (20) 『金鉤論』…『大正』四六卷七八二頁下。
- (21) 正觀章…『摩訶止観』第七正修止観(『大正』四六卷五四頁上)「夫一心具十法界。一法界又具十法界。百法界。一界具三十種世間。百法界即具三千種世間。此三千在一念心。若無心而已。介爾有心即具三千。」
- (22) 『義科盧談、法華玄義』…『統天台宗全書』論草1。十一、十如是義案立、一七三頁中、一八一頁中下。
- (23) 『摩訶止観伊賀抄』…『統天台宗全書』顯教1、二九、造境即中事。

一〇六下～一〇七頁上)

- (24) 『草木発心修行成仏記』の作成の経緯・同書の奥書には、「本云延元元年（二三三六）三月十三日、於大定坊賜御本、託俊賀大德書寫之畢。俊憲在判」とある。「大定坊」とは、西塔東谷にあり毘沙門堂流の主坊であり、この「俊憲」とは同坊僧都義憲の弟子の俊憲である。また、「俊賀」とは、東塔東谷仏頂尾光聚房の俊賀（一三三〇）である。当時、光聚房には、俊賀蔵があり、毘沙門堂流公海の『義科如影随形抄』等も収集している。なお、義憲の弟子には光聚房法印の実源があり、両寺は親密な関係にあった。

毘沙門堂は、草木成仏論については、公海の『宗要如影随形抄』からも知れる通り、当初は、草木不成仏説をとっていた。しかしながら、經海座主の恵心流相承に伴い、その教義が変化した。草木成仏においても、発心修行成仏説をとるに至る。その内容は、義憲の口述録『毘沙門堂（雑雑口決集）』（正教蔵写本）から知られ、その口述時期・内容は、『草木発心修行成仏記』の書写と一致する。

従って、義憲が秀範の『草木発心修行記』をもとに内容を整理補強し、草木の「生住異滅の四相」がその発心修行菩提涅槃の姿であるとの見解等を盛り込み、自流の教義に取り入れたことが知れる。

なお、毘沙門堂の教義変化に伴い、論議の場面で周囲の人師が困惑した様子は、頼増の『宗要宝樹房』（葉樹院蔵版本、一三二〇年頃の論議）に良く描かれている。

- (25) 『毘沙門堂（雑雑口決集）』…義憲口述・俊憲記。正教蔵写本。

- (26) 『唐決』（天台宗未決）…『天台宗全書』一〇〇巻八七頁上。八四八頁中。八五七頁上。参考、末本文美士『平安初期仏教思想の研究』『唐決』三七三～三七四頁

- (27) 御廟大師の草木成仏思想を伝える文献には次のようなものがある。

① 政海『類聚鈔』（真如蔵）には、「我朝、伝教・慈覚・義真・智証・御廟大師・五大院先徳、同草木成仏義存。恵心・都率・寛印供奉・千観内供等、所判本来成仏義、不_レ遮_レ之。但_レ於_レ発心修行義、遮_レ之見タリ。」として、御廟大師が安然と同様に、草木の発心成仏

の思想を有していたことを指摘している。

但し、良源が重視した論議の場においては、『宗円集』（正教蔵写本）等が伝えるように、「一家円宗、色・心二法互具相即。一切諸法撰_レ属_レ於_レ色、此之日、草木国土発心修行、断_レ最後品（根本無明）得_レ朗然妙果。一切諸法撰_レ属_レ於_レ色、此之日、一切有情全無_レ発心修行之義。此是真実仏也歟」として、「成・不成無相違」の立場をとっている。

- (2) 法相宗との論議については、政海『類聚鈔』（真如蔵）には、「天曆宗論時（天曆八年）、慈恵大師対_レ義照論_レ草木成仏義時、大師彈呵曰。汝、雖_レ学_レ法相偏宗、兼_レ為_レ瑜伽行人。寄_レ秘密觀門、可_レ信_レ天台草木成仏。被_レ封_レ法相本宗。猶_レ又欲_レ希_レ依正同異。義照院聞_レ此御言、流_レ涙、帰伏畢。」と伝えている。

また、良源が法相宗との仏性義の違いを述べたとするものに、『義科廬談』法華文句、無情仏性義（一三五二年、『統天台宗全書』論草2）があり、その根拠には『円覚經』をあげる。

- (3) 公海『宗要如影随形抄』（正教蔵）には、算題の一行に「御廟相承如何」の一行目を加え、草木成仏については「無相違」としている。慈恵大師の撰とされる『宗要九十算』（『天台電標』第七編1）には、論目に「草木成仏」があり、そこには「答。教依_レ法華・涅槃。理依_レ色香中道理也。」とあるが、問答は『宗要柏原案立』（『大正』七四卷）を参考にした後世の挿入である。

- (4) 一方、中古檀那流の口伝文献『北谷秘典』（『統天全』口決2・檀那流1）玄旨五箇血脈（二）一心三觀傳慈恵（四）一心三觀記、覺運）には、止観一（頓是）に云う「是者。非作法。非佛、非天・人・修羅所作。常境無相、常智無縁。以_レ無縁智、縁無相境。無相之境相無縁之智、智境冥一。而言境智。故名無作也。」を引用し、本地法身法界塔婆・常寂光土・無作三身（本門而二不二）の主張が見られる。

- (5) 応和宗論の物語としては『塵添鑑囊鈔』（一四四六年、『日仏全』百五十巻三九八上～三九九頁上）や『太平記』（一三六八

(ほりばた えいいち 文学研究科仏教学専攻博士後期課程)

(指導教員・小野田 俊蔵 教授)

二〇一四年九月三十日受理

- (28) 『宗円集』…正教蔵写本(良源注之)。同様文献に『宗満集』(正教蔵)や『紅葉惣録』(統天全口決^二)があり、御廟相承に「無相違」として、多義あることを伝える。
- (29) 心賀『日記』…真如蔵写本。『日記』第十五、草木成仏「寿量品意^ハ、事々体々・法々・塵々、其ママ^ニ自体、自受用常住^{ナルヲ}」云也。本地寿量云是也。雖^モ機根位・体用位、惣^テ一切法皆悉^ハ法体法爾^{トシテ}、自心有也。此惣^ニ法体、真言云^ニ「法界体性智^ハ」也。
- (30) 『例講問答書合』…『天台宗全書』第二三、四三〇頁「業義六」。参考文献『論義の研究』野本覺成「天台の論義・草木成仏」(智山勧学会編)
- (31) 延海『手中抄』…正教蔵写本・真如蔵写本。その抜粹、『草木成仏類聚』(雙嚴院蔵写本)在中。
- (32) 『宗要宝樹房』…叡山文庫薬樹院蔵版本寛文五年版(一六六五)周知の文献…湛然『止観輔行伝弘決』非情仏性の十義(『大正』四六卷)、『金錚論』無情有性(『大正』四六卷)。安然『即身成仏義私記』(『佛全』二四小部集釋)、『樹定草木成仏私記』(無動寺蔵版本)、『菩提心義抄』四重成仏相(『大正』七五卷)等。
- (34) 『政海類聚鈔』八十卷…実蔵房真如蔵写本。その中の雑部第九「草木成仏」には、①依^ニ何教理^一、立^ニ草木成仏義^ヲ耶。②草木実発心修行成仏可^レ云耶。③草木具^ニ十如是^一可^レ云耶。④草木説法利生^{スト}可^レ云耶。⑤法花已前論^ニ草木成仏義^一耶。⑥仏性十義中、第七義、如何釈給耶。⑦專在慮知心者事。⑧此即永転事が記されている。
- (35) 相応・檀那の思想的なつながりについては、「恵壇両流諸箇秘訣下」二ヶ大事。『興風叢書』十七、七九下〜八〇頁上を参照されたい。